

8) サルビア

サルビアはシソ科サルビア属の総称である。ヨーロッパの地中海沿岸および中南米原産の多年草で、世界には約 500 種が分布する。一般によく栽培されるのはブラジル原産のヒゴロモ草と称するもので、日本では春蒔きの一年草として扱われている。夏の花壇によく植えられ、秋遅くまで**総状花序**を出し美しい唇形花を咲かせてくれる。和名は本種の属名『*Salvia*』に由来し、「健康でいる」という意味で、本種の仲間には薬効のある草が多く含まれているためである。イギリスでは『scarlet sage』と呼ばれ、『風と共に去りぬ』のスカーレット・オハラのスカーレットで、朱赤色の花色に由来する。サルビアには矮性種で草丈が 30~40cm のものから、50~70cm の中高性種のものまであり、花色も豊富で赤色の他、白色、紫色、淡紅色などさまざまである。しかし何といてもこの花の真価は緋赤色の鮮やかな色合いで、ボンファイアとかセントジョーンズ・ファイアなどという品種があり、目の覚めるような色彩をしている。またセイジと呼ばれる薬用サルビアの中には葉に精油を含み、民間薬として強壮、発汗、駆虫、健胃剤などなどとして用いられる他、香辛料として料理に使用されるものもある。このためヨーロッパではサルビアというと、通常はヨーロッパ原産の薬用サルビアを指すことが多い(05-02-14 セイジの項参照)。

サルビアが初めて文献に登場するのは、プリニウスの『博物誌』で、当時すでに薬草として知られていた。園芸種のサルビアはブラジル南部の原産で、1822 年にはイギリスに伝わった。日本に園芸種のサルビアが渡来したのは、1890 年(明治 20 年)頃で、それ以前に伝わったものはサルヒヤと称する香辛野菜のセイジ、もしくは薬用種であった。現在花壇で植えられているような品種が栽培されるようになったのは、昭和になってからのことである。

サルビアの繁殖は普通実生によるが、発芽率はあまり良いほうではない。植木鉢や発砲スチロールの蒔き床に播種して軽く土をかけ、発芽するまで乾かないように管理する。発芽後は本葉が 5~7 枚程度になるまでそのまま育てて、その後は 30cm 間隔ぐらいに本植えする。植え場所はよく陽が当たり水はけのよいところで、基肥として堆肥を十分にすきこむようにする。夏の花が終わった時点でやや剪定をし、全体を刈り込んでおくと秋に再び花を咲かせて、霜が降りるまで咲き続けてくれる。植木鉢やプランターで育てるときも同じようにするが、この場合は基肥を多めに施し、また夏の花が終わったときには化成肥料をお礼肥として与えるようにするとよい。しかしどう育てても幼苗のうちは立ち枯れ病や、ヨトウムシによくやられるので、糞の塊が発見されたときには、夜、懐中電灯で探し出して捕殺するようにする。幼苗は花屋さんで 100 円ぐらいで売られていることが多いが、2~3 年続けて栽培するときには肥料のほか石灰を入れて、土が酸性にならないようにする。また最近では、この仲間の観葉植物も多く販売されている。



サルビアは種類が多く『香草と香木』でも記したが、赤白の対比が美しいこんなサルビアもある。



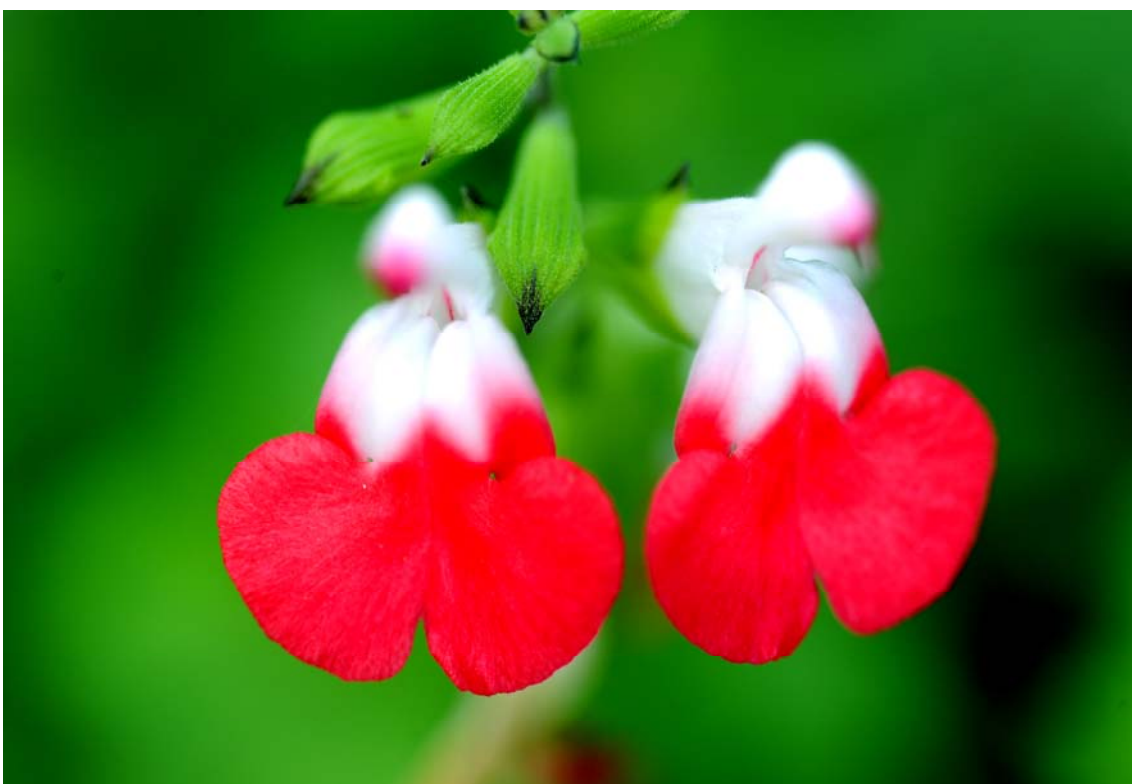
緋赤色が美しいサルビアは夏から晩秋まで咲き続ける。



美しい花を咲かせるチェリーセージには2種類あって、それぞれの学名は『*Salvia greggii*』と『*Salvia microphylla*』で、前者は寒さにも強く育てやすい(東京都小平市薬用植物園)。



秋の紅花サルビアは05-02-14でも取り上げた種である。参考にして戴きたい(薬用植物園)。



ホットリップスと呼ばれるこの種は、夏の暑い時期には赤花を多くつけ、秋になって気温が下がってくると白花を多くつける変わり者で、それゆえに愛培されている(さいたま市緑区)。 [目次に戻る](#)